三斎流
九曜会だより

発　行
三斎流九曜会
会長　小林祥泰
事務局　出雲市今市町53

天候に恵まれ 二十周年記念「新樹の茶会」が盛大に

新緑香る道場 市民らで賑わう

平成二十八年四月二十九日〈昭和の日〉 観翠庵道場・観音寺書院にて

観音寺書院　薄茶席

昭和六十三年、宗瑞宗匠が、観翠庵道場を開放し一般の方にも広くお茶を楽しんでいただこうと始まった「藪椿の茶会」。その後、宗育宗匠が「新樹の茶会」と名称を新たに変えて今年で二十年目を迎え、観翠庵道場と観音寺で記念のお茶会が開かれた。藪椿の茶会から数えると来年で実に三十年目を迎え、現在では市民の皆様にも三斎流茶道を親しめるお茶会として定着している。

観音寺書院では薄茶席、本堂では点心席が設けられ、ちらし寿司が振る舞われた。道場の富士の間では薄茶席、書院前庭では呈茶席が設けられた。

当日は、記念茶会を祝福するように晴天に恵まれ、朝から多くの人で賑わった。

富士の間 薄茶席

二十回記念「新樹の茶会」会記の一部

待合（観音寺）

床　小村大雲筆　竹三鶯画

薄茶席（観音寺書院）　席担当　直門

床　宙宝宗宇筆　横物　萬歳
花入　怡園公（御銘）　忘路　竹一重切
花　季のもの　立口丸形
釜　浄味造
炉　椽　真塗　九曜紋　桐蒔絵
水指　利休形真塗手桶
茶器　尾長鳥蒔絵　原羊遊斎作
茶盌　了入赤
替　わらび絵　永楽善五郎作
茶杓　大綱和尚　共筒箱（銘）　南乃山
建水　曲
蓋置　備前　松葉彫
御茶　宗浦家元好　天香の白　松露亭作　徹笑庵詰
御菓子　祝い菓
菓子器　高杯　九曜紋　いしはら製

待合（観翠庵書院）

床　横山清暉筆　錦鶏牡丹ノ図

薄茶席（観翠庵富士の間）　席担当　山田　加儀　社中

床　観翠庵宗瑞筆　利休居士茶の湯の語
花入　宗浦家元自作　信楽　砧
花　季のもの
香合　観翠庵宗瑞好　蛤
釜　万字釜　柳楽康久作
炉　椽　真塗　島　春斎造
風炉先　宗浦家元自筆　山ノ画　杉
棚　桑小卓　波部良和作
水指　楽山　山田無文老大師（銘）　須弥山
茶器　吹雪　あざみ　長門宝楽作

「新樹の茶会」のあゆみ

森山 宗育

新樹の茶会はその昔、昭和六十年頃から「藪椿の茶会」として催されていました。その当時の案内状を見ますと、「数百年の老樹が生い茂る観翠庵道場にも漸く春が訪れ、今年も藪椿が咲き出しました。久方ぶりに釜掛けて粗茶差し上げたく存じます。どうぞ茶友の皆様お誘い合わせの上、ご来庵くださいませ…」という文章で、四月二十七日から三日間に渡り、県内外のお茶人方をお招きし、大いに賑わっていました。

平成九年頃まで、観翠庵と九曜会の主催にて、二日間に渡ってのお茶会でした。その頃、同じ時節に出雲文化伝承館のお茶会が開催される事となった他、藪椿の開花の変化等により、日時を一日のみとすることにしました。当時四月二十九日が「緑の日」でありましたので、この日をお茶会の日と定め、名称を、葉が芽吹き、瑞々しい樹木、緑に囲まれた道場を思い「新樹の茶会」と私が名付け、現在に至っております。

主催は九曜会、席主は先生方の担当としました。会場となる道場を一般公開とし、市民の方々に気軽にお越しいただき、広くお茶に親しんでいただく事、そして三斎流観翠庵道場をより広く知っていただくようにした次第でございます。以上が、新樹の茶会のあゆみです。

会員の皆様一人ひとりが我が道場として認識していただき、新樹の茶会が末長く続きますことを念じております。

写真で振り返る「新樹の茶会」

●平成九年三月二十二日・二十三日

新樹の茶会の前身となる「藪椿の茶会」。藪椿が可憐に咲く森の中での野点席（薄茶）。富士の間では濃茶の呈茶席が設けられた。

●平成十一年四月二十九日

三年前に新築された観音寺書院では濃茶でおもてなし。庭の植え込みや美しい白砂を眺めながらの一服だった。道場（薄茶席）の庭は、木々は若葉が萌え、明るい陽の光に透けるような新緑が美しく、「新樹」にふさわしい茶会だった。

●平成十五年四月二十九日

宗浦家元（当時若宗匠）と典子様とのご結婚の祝福にあわせ、お披露目が八寸席であった。前庭ではそば席も設けられた。

●平成二十四年四月二十九日

観音寺書院・観翠庵道場

観翠庵道場を広く他流及び市民の方に親しんで頂く唯一の茶会である。

濃茶席では庭の新緑も美しく新樹の茶会にはとても相応しい気持ちの良いお茶会だった。

薄茶席では典子先生ご指導の十七人の子供達を見て、茶道の心が育っていることにとても心強く又嬉しく思った。

濃茶席（観音寺書院）床飾

薄茶席（富士の間）掛軸・花

●築五十周年記念

平成二十五年四月二十九日

【濃茶席】観音寺書院

【薄茶席】観翠庵道場　富士の間

来客者数　一六八名

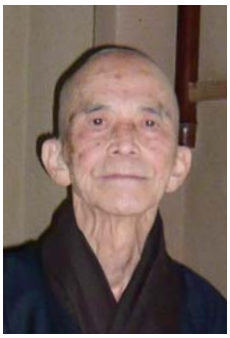
今年は築五十周年と出雲大社の大遷宮が重なり、茶席のテーマは自ずとお祝いを意識した設えとなりました。五十年の重みと逆に若さと華やかさを表すため、お点前は今一番伸び盛りの若手三人が担当しました。実は濃茶点前の初デビューでしたが、とても堂々としたお点前で後見しながら驚きました。このような茶席での経験が大きな自信となります。これからの活躍に期待しております。

先達探訪
～三斎流の先生を訪ねて～

今号からスタートしたこのシリーズ「先達探訪～三斎流の先生を訪ねて～」。三斎流の諸先生、諸先輩方を訪問し、これまで歩んでこられたお茶の道についてお話を伺うというコーナーです。第一回目は、峯寺の松浦快芳先生です。

―第一回―

松浦快芳先生を訪ねて


松浦快芳先生

平成二十八年二月中旬、春を思わせるような暖かい小雨の中、雲南市三刀屋町給下の山腹にある出雲大峯・峯寺にやって参りました。

鳥の声さえ聞こえないほどの静寂に包まれ、とても緊張してしまいましたが、玄関を入り松浦先生の穏やかなお顔を拝見して少し落ち着いてきました。

昭和三年十一月のお生まれで、現在八十八歳。インタビューでは、終始笑顔を絶やさず、昔のことをとても懐かしむようにお話ししていただきました。

最初に三斎流との出会いなどをお聞きしたいとお願いしましたところ、昨年出版された『山に祈る』(山陰中央新報社)を見て参考にしてほしいとのご返事でした。平成十七年から十年間、山陰中央新報に連載された随想録をまとめられた本のことです。同著の中からも先生の想いを合わせてご紹介させていただきます。

峯寺は、六五八年に創設されたと伝わる真言宗の古刹であります。先生は昭和十一年にお父様を亡くされ、続いて二人のお兄様まで亡くされお母様とともに大変厳しい終戦を迎えられました。戦後、住職の資格を得るため京都の本山仁和寺に寄宿され、働きながら苦学の末宗門大学を卒業し、お母様が一人待ちわびる峯寺に帰山されたのが昭和二十七年の春でした。しかし、その後修学の疲れのため、体を壊しやむなく養生をせねばならなかった時期もあったそうです。

その頃、めったにお参りのない観音様に手を合わす一見風流人とおぼしき人をお母様が呼び止められ、庭園に通してお抹茶を差し上げられたそうです。その方がのちに松浦先生の茶道の師となる森山祥山宗匠だったそうです。養生中だった当時の松浦先生にいたく同情され、三斎流入門の許可を出されたそうです。その後、約二十年間熱心に出雲まで通いお稽古に励まれ、また、ご自身も宗匠の代稽古として周辺の人たちに茶道を峯寺で教えられていました。そのため、雲南地区で三斎流が徐々に広まっていきました。祥山宗匠は常々峯寺を三斎流の雲南道場と切望しておられたため、雲南の拠点の一翼を担うこととなりました。

昭和二十八年四月二十九日には、峯寺において県下では初めての山陰各流合同春季大茶会が行われました。その後、昭和三十三年に先生をはじめ木次、三刀屋のお茶の同門の方たちによって「翠木会」が設立されました。

また、三刀屋高校に茶道必修クラブが発足し、先生に非常勤講師として教授のお願いがありました。ただ、男子校であったため茶道をする場所もなく、考えられた末に野外授業となったそうです。しかし、この野外授業が生徒たちにとても評判がよく、先生も「キャンプをするみたいな感じで楽しんで授業をし、それに上等なお菓子まで食べられたからよかったのでしょう」と笑いながら懐かしそうに話されていました。

昭和四十七年五月には三刀屋、木次だけでなく大東、加茂、掛合を含め、「雲南翠木会」と名称も改めて設立され、現在も多くの会員の方たちによって魅力ある会となり続けられています。

インタビューの最後に話されたことですが、昨年十一月に峯寺で秘仏観世音菩薩特別開帳での法要があり、それに先立って三斎流観翠庵家元森山宗浦宗匠による献茶式が行われました。そのことがとても嬉しかったと何度も何度も口にされていました。祥山宗匠と出会われて以来、観翠庵を常に大切に思っておられるからこそ口にされたと強く感じました。

昨年に第四十三世住職を退かれた現在も、奥様やスタッフの方々と、参拝者や来山者の方々を暖かく迎えられ、おもてなしをされておられます。

（広報部・吾郷俊子）

○峯寺で献茶式

秘仏御開帳と第四十四世晋山式に合わせて

平成二十七年十一月十四日㈯

三斎流と縁の深い古刹、出雲大峯・峯寺で、秘仏御開帳法要と第四十四世晋山式に先立ち、同寺観音堂にて森山宗浦家元様の御献茶式が行われました。

通常三十三年に一度の御開帳となる秘仏「大慈大悲観世音菩薩」が臨時開帳され、多くの寺院関係者や参拝者が見守る中での厳かな献茶式となりました。

御開帳の法要の後、観音堂前に設けられた拝復席で、直門の皆さんが参拝者の方々に点出しで呈茶を差し上げました。

皇室ゆかりの茶室・茶庭参観記

―桂離宮・仙洞御所・修学院離宮―

和田 貞夫

出雲文化伝承館長に就任して館内を案内、解説するようになって茶室や茶庭に強い関心を持ち、全国の著名な茶室・茶庭を見て廻ったが宮内庁所管の施設だけには縁がなかった。

ところが、娘婿が京都の桂離宮・仙洞御所・修学院離宮の参観許可を宮内庁から取ってくれたので、娘と京都の大学院生の孫の三人で初春の三月に史上最高の茶室・茶庭を参観することができた。

◆茶庭と茶室

茶庭は、茶室への道すがら（路地）として造られたもので千利休は、「数奇は路地入にて見る事肝要」と説いており、茶の湯は路地入から始まる。深山の山道の侘びしさを味わいながら茶室に入り茶を楽しむ喜びが路地にはある。その精神性の深さ故に、路地を露地と呼んでいる。

◆桂離宮

参観料金は無料であるが、事前に許可申請の手続きが必要で、当日は宮内庁からの参観許可証と身分証明書が必要であった。

参観者は四十名で学芸員の説明付き、見学時間は四十分の参観であったが、列の背後に皇宮警察官の監視が付いているのには若干、驚いた。

桂離宮は、後陽成天皇の弟である八条宮智仁親王が創設した別荘で、二代智忠親王・三代穏仁親王と造営が続けられて寛文三年（一六六三）に完結した。智仁親王は学問に優れ、細川幽斎公に今古伝授を受けておられる文化人で、桂離宮は王朝文化を現代に伝える重要な文化財である。

八条宮家はその後、京極宮・桂宮と改称されて明治に至って十一代で絶えるが、桂山荘のみが桂離宮として今日に創建以来の姿を伝えている。

参観順路は、表門右手の黒御門から入り、御幸門を通って御幸通を進む。御幸通は直線に延びた深い緑の樹木の中を歩むと、突然視界が開けて池の水辺に着くが黒い扁平な石を敷き並べた州浜がすばらしい。州浜の先端に灯籠を据えて岬の灯台に見立てて海の景とし、右手から長く延びる造形を天の橋立に見立てている。庭園には、海・山・田園の景色が、さりげなく周到に配置されていて苑路を巡ると実に目を楽しませてくれる。

桂離宮で最も格式の高い茶室が松琴亭で、入口に後陽成天皇の宸筆による扁額が掛けられている。茅葺き入母屋造りの茶室で、特に見たかった白と濃い青の市松模様の斬新な意匠の襖が迎えてくれる。市松模様は、東京オリンピックのエンブレムでも採用された日本を代表するデザインで知られている。また、室内では茶事に供する料理の保温に用いられたという寒さを防ぐ石炉（暖炉）が珍しかった。茶室から見る庭は、正面に天の橋立の造形や州浜が見え、見事な景色となっている。余談ではあるが、足立美術館の茶室は松琴亭を模して造ったといわれている。

順路に従って苑路を進むと、峠の茶屋風の賞花亭、細川幽斎公の画像が祀ってある園林堂に出る。更に進むと、池の最奥にあるのが田舎屋風の茶室の笑意軒で、中の間の腰壁の張付けに市松模様のビロードを金箔が鋭く切り裂く斬新な意匠がなされており、特に目を引いた。

桂離宮の中枢をなす建物が、御殿（書院）で古書院・中書院・新書院と雁行して三度の工事で創建され、その簡素で美しい姿は、数寄屋建築・書院造りの代表傑作として人々を引き付けてきた。

古書院の正面から池に突き出すような月見と納涼を目的に竹で作られた月見台が設置されているが、更に月と池を眺めるために池辺に月波楼が建てられており、茶室全体が舟底天井という化粧屋根裏で覆われていて、月を見んと舟を漕ぎ出す風情を演出している。月波楼の名は、伯楽天の七言律詩から得ており松花堂昭乗筆の扁額が表に掛けてあった。

参観の順路は、中門を抜けて真の飛石という有名な石畳を歩み、杉苔で覆われた石段を通って書院の玄関である御輿寄に寄り、参観者休所に入って解散となった。

参観順路で特に気付くのは、桂垣や穂垣といわれる桂離宮独特の竹垣が長い苑路に添って続いており、豊かな景観を形成している。

松琴亭

◆仙洞御所

仙洞御所とは、皇位を退かれた天皇（上皇・院）の御所を言う。

江戸初期に、後水尾上皇の御所として創建されて以来、霊元・中御所・桜町・御桜町・光格の五代上皇の御所として使用されてきたが度々焼失し、嘉永七年（一八五四）の大火で焼けた後は造営されず、現在は醒花亭と又新亭の茶室以外に建物はなく、雄大な庭園のみが往時の面影を残しているだけとなっている。庭園は、仙洞御所の作事奉行であった小堀遠州の作庭によるものである。

北西にある大宮御所は、皇太后の御所で現在でも、天皇皇后両殿下や外国元首等の御宿舎として用いられているが、その大宮御所の庭園（北池）と仙洞御所の庭園

市松模様の襖と床

（南池）が堀割で結ばれて一体となった回遊式大庭園である。

仙洞御所を参観するための出入門は大宮御所の正門を用いているので、正門から入って休所に参観者一同が集結すると、係員の誘導に従って大宮御所御常御殿の東の御庭口門から仙洞御所内に入る。

参観で最初に目にするのが、北池の全景で対岸には中島があり、その上方の樹林の合間に借景に取り入れている東山の峰が見える。小堀遠州の作庭による庭園は、その後折々に改変され宮廷好みに造り直されて今日を迎えている。

参観苑路は、広大な北池の全景を眺めながら紅葉山、蘇鉄山の山裾を縫うように進んで行く。御所の北方には藤原道長の邸宅跡があって紫式部日記に出てくる情景が偲ばれる。更に進むと、小山の頂に紀貫之の邸宅跡と記した石碑が立っている。

南池の州浜

やがて南池に入ると、小堀遠州作庭の名残りをとどめる石組みの数々が見られ、禅宗庭園の趣きが感じられる。南池で特に見事であったのは、州浜である。楕円形に丸く平たい粒の揃った石が十一万一千個ほどが、岸辺から池の中まで敷き詰められている。光格上皇の時、小田原城主大久保忠真の献上によるもので、石一個を米一升と取り替えて集めたので一升石と呼ばれている。

南池の奥に建つのが醒花亭で、周囲の植込みとよく調和し、単に茶室としての役割だけでなく庭園の景色となっている。こけら葺き、べんがら色壁の数寄屋造りの繊細なデザインの茶室である。醒花の名は李白の詩から取られたものであるが、露地を飛石に沿って進むと銭型の蹲踞と加藤清正の献上品である朝鮮灯籠が植込みとよく調和していて気持ちが和む。

南池の苑路を北に進むと、明治十七年に近衛家から献上された又新亭がある。茅葺きとこけら葺きの屋根と大きな丸窓を備えた草庵風の茶室で、外露地と内露地が中門で区別され、また露地と茶室は四つ目角垣で仕切りをつけて、侘茶の小世界を形づくっている。

松竹梅の庭として有名な大宮御所御常御殿の南庭の横を通って御所の御車寄に出、休所に入って参観は終わった。

◆修学院離宮

修学院離宮は、比叡山の麓、東山連峰の山裾に造られた上・中・下の三つの離宮（御茶室）からなり、借景とする背後の山林と三つの離宮をつなぐ松並木道、その周辺の田畑をふくむ広大な離宮である。山麓に広がる敷地は、標高差が四十メートルあって流れの早い小川や大小の滝がある。

京都駅から京阪電車で出町柳駅まで行き、叡山電車に乗り替えて修学院駅で降り徒歩二十分で離宮の表門に着く。

修学院離宮は、後水尾上皇によって明暦元年（一六五五）に造営が始まり、万治二年（一六五九）に完成した。

参観者一同、御幸門から入って下離宮の寿月観の前に進む。後水尾上皇好みの数寄屋造りの茶室で、室内から見る前庭の調和のある雄大な景色がすばらしい。

苑路を右に進むと、中離宮に入る。後水尾上皇の皇女光子内親王の御所で客殿と楽只軒の建物から成っている。内部は女性のお住まいらしく華やかな造りである。特に客殿は後水尾上皇の皇后東福門院の女院御所を移築したもので、随所に葵の紋が配された豪華な建物で徳川家から嫁いだ東福門院の姿が偲ばれる。

苑路は、松並木（御馬車道）となって上へ登って行く。かつては三つの離宮を上・中・下の御茶屋と呼び、水田の畦道を往き来していたが、明治天皇の行幸の時に松並木道が整備されて馬車で通う広い苑路となった。

御幸門から上離宮に入ると、浴龍池を中心とする雄大な眺望が目に入る。泳ぐ龍の姿を島形に模した池を巡って苑路が続くが、最も高い位置に建てられた茶室が燐雲亭である。雲に隣する亭にふさわしい眼下に浴龍池を収め、北山や西山の峰々、京の街が一望できる。室内装飾は一切なく、内部より外の自然の景色に向かうことを第一とする造りであった。

楓橋を渡った中島に窮邃亭がある。十八畳一室の簡素な茶室であるが、上段を高くして上皇の御座所にふさわしい造りとなっており、御水尾上皇の宸筆による扁額が掛けられてあった。

土橋を渡って苑路を下ると、御舟宿に出る。広い池に舟をうかべて島々を廻りながら管弦や詩歌の会が行われ、楽しんだという。

松並木道を下って御幸門にで、休所に入って参観は終わった。

◆帰路

修学院離宮は、三つの離宮が田園や背後の山林を取り込み、また京都の山々や市街までを借景としており、その雄大なスケールに圧倒され、全身で感動した参観であった。

その感動の余韻に酔いながら帰路、近くの曼殊院を訪ねた。この院は桂離宮を建立された八条宮智仁親王の次男良尚親王の造営によるもので、どことなく書院や庭園共に桂離宮によく似ており、一層感動をもって拝観した次第で、このたびの参観の旅に花を添えたのであった。

僅かに二日と短い期間ではあったが、実に収穫の多い皇室ゆかりの茶室・庭園の訪問、参観する旅であった。

窮邃亭

浴龍池

九曜会事業報告

〈平成二十七年七月～平成二十八年六月〉

○九曜会総会

平成二十七年七月十二日(日)
ニューウェルシティ出雲
担当　役員、事業部、直門（立礼席）

平成二十七年度総会が会員一〇一人の出席のもと盛大に開催されました。

小林祥泰会長様、森山宗浦家元様のご挨拶に続き、二十六年度の事業及び決算報告、二十七年度の事業計画、予算書の審議が承認可決されました。

立礼席を直門が担当しました。

午後は島根県立美術館の学芸専門官、藤間寛氏による「三斎流と松平不昧公」と題した講演が行われました。

小林祥泰会長

島根県立美術館学芸専門官・藤間寛氏

○出雲大社亀山茶会

平成二十七年九月二十七日(日)

宗浦家元の御献茶

【濃茶席】
北島国造館　奥書院
担当　大田社中
来客者数　一三八名

九月二十七日、恒例の献茶式に濃茶席を添え釜させて頂きました。担当は六年振りでした。毎年、亀山茶会は残暑厳しい思い出が有りますが、今年は秋も少し深まり、丁度中秋の名月、夜にはお月様の姿も見えるのではと話しながらの席となりました。何よりも涼しくて良かったねと、皆の本音も出ていました。

無事に終わってホッとしているところです。次回に向けて、日々楽しみながらの精進を話し合いました。

【薄茶席】
北島国造館　亀山会館
担当　大平・杉原社中
来客者数　一七〇名

早くから打ち合わせや稽古を積み重ね、二社中が心を一つにして、緊張と不安の中で当日を迎えました。幸いお天気も良く、気持ちよくご来賓様をはじめ、ご来席の皆様を迎える事が出来ました。今年は天神社の正遷宮祭が行われたばかりで、縁起の良い設えという思いで準備いたしました。特に短冊に書かれている唐詩やお菓子の銘「菊の露」、「宇迦」のお茶杓銘についてのお話をさせて頂きました。

いつもの事ながら、水屋ではお茶の量、温度に気を付けながらやりましたが、お客様の中には、懐紙の無い人・御菓子だけお持ち帰りになる人もあり、懐紙その他、準備の点での少々不足していたかなと反省しました。これらの課題を次への向上につなぐよう、更に努力していきたいと思います。

亀山会館

○松江城大茶会

平成二十七年十月三日(土)・四日(日)
松江歴史会館
担当　辰村・佐藤・沼・隠岐社中
来客者数　三日　三六一名
　　四日　三四三名

松江城、国宝の決め手になった祈祷札が展示され、多くの観光客で賑わう松江歴史館の大広間が、今年の三斎流のお茶席となりました。お茶席からは天守を間近に望む事が出来、設えやお菓子など其処ここにお祝いムードが漂う晴れやかな二日間となりました。

展観席、待合、水屋は会議室を使用させて頂き、各社中協力し合ってお客様をおもてなししました。不手際もありましたが、三斎流の武家のお点前に、興味を持っていただき、天守を模ったお菓子はとても好評で、和やかなお茶席となりました。

松江城天守を望む松江歴史館

○一畑薬師茶会

平成二十七年十一月二十二日(日)
一畑寺　東陽坊茶室
担当　福間社中
来客者数　二九七名

当日は十一月下旬とは思えない良い天気に恵まれ、二十回記念の茶会にふさわしく、多くのお客様に来ていただきました。

席入りのやり方や、受付の流れがこれまでと異なっていた為、お客様方も戸惑われ、受付担当者は東陽坊への案内もあり、とても大変だったと思います。また、番号札に予め、三十分刻みに席入りの時間が記入してあった為、実際との時間が少しずつずれていき、八席目で三十分のずれが生じてしまい、お客様にご迷惑をお掛けすることとなりました。次回はスムーズに流れるように工夫が必要かと思います。

一畑寺　東陽坊茶室

○三斎忌

平成二十七年十二月六日(日)

読経後の朝山一玄師の法話を聞く参加者

【濃茶席】
観翠庵道場　松霞亭
担当　伊藤社中
参加者数　六六名

穏やかな天候に恵まれて三斎忌を迎えられ、前日までのお掃除と準備に気持ちの良い濃茶席となる様、社中全員心を込めて担当させて頂きました。

何より嬉しく励みになりましたのは、三斎流で最高齢の九十一才で指導をして下さいます伊藤先生が、家元をはじめ各社中の先生方や皆様にご挨拶に出られる事が出来て心から喜んでおられた事です。祥山宗匠、宗瑞宗匠から頂かれた思い出のお道具に懐かしい会話が弾み、終始とても和やかな御席になり、社中一同深く心に残る三斎忌の担当となりました。

観翠庵道場　松霞亭

【薄茶席】
観翠庵道場　富士の間
担当　杉山社中
参加者数　六三名

今年の三斎忌は幸いに好天気に恵まれ、六三名の参加がありました。薄茶席の床に掛けた宗瑞宗匠「羊拄角」は昭和五十四年にお書きになったもので、初めて三斎忌に掛けさせて頂きました。水指は砂張りの祥山宗匠画、地に竹と笹が描かれ、お客様より「モダンですね」とのことでした。お点前は広沢、錦織、後見は杉山がつとめ、入門して間もない嘉本は給仕、水屋はベテランの石田に加え九曜会より松尾様に応援を頂き、勉強することも多々ありました。何につけても力不足の私達でしたが、お客様からの暖かい力添えを戴いて肩のこらない和やかな茶席にしていただいたと社中一同感謝しております。

○早春の茶会

平成二十八年三月二十六日(土)
出雲文化伝承館　松籟亭
担当　加茂会・野々村社中
来客者数　五〇七名

今年は伝承館が各席に椅子十脚を準備して下さいましたが、お客様は椅子席から座って行かれる状態でした。さらに五脚多ければと感じました。

季節に合った物が揃わず、有りあわせの席でしたが、帰る時に受付に「気持ちの良い席でした」と何人も声をかけてくださったと聞き本当にうれしく思いました。

スタッフも年々、年を重ね、長時間の正座が難しく、水屋も立ち机を入れて頂きました。それぞれの持ち場を一生懸命務めて貰い、無事に担当を終える事が出来、感謝しております。

出雲文化伝承館　松籟亭

○新樹の茶会

平成二十八年四月二十九日(金・祝)

【薄茶席】
観翠庵道場　富士の間
担当　山田・加儀社中
来客者数　二五一名

当日は、新樹の茶会にふさわしい新緑の中に、天気にも恵まれ、今回二十回を迎えた記念茶会には、例年より多くの皆様に御来席頂きました。

一席二十数名入って頂きましたが、随分お待ち頂いた事、入席出来なかった方々もいらっしゃった事等、反省点が多々ありました。お蔭様で、皆様方のお力をお借りして、無事に終えることが出来ました。

これからも、社中一同お稽古に励み、日々精進してまいりたいと思います。

【薄茶席】
観音寺書院
担当　直門
来客者数　三三二名

新樹の茶会二十回記念の茶会に、直門の老若コンビが担当させて頂きました。晴天に恵まれ沢山の方に来ていただき、有難うございました。

庭の新緑と若さにあふれる、フレッシュさが相俟ってさわやかなおもてなしが出来たと思います。

ただ時間帯によっては、待ち時間が長くて席に通っていただけず、お帰りになられた方もいらっしゃった様で、申し訳なく思います。この事については課題が残りました。

観音寺書院

富士の間

【呈茶席】
観翠庵道場中庭
担当　事業部

【点心席】
観音寺本堂
担当　樋野社中・直門

担当したメンバー

○お堀端茶会

平成二十八年五月三日(火・祝)
松江歴史館
担当　安来・米子・大田社中
来客者数　九〇名

大型連休中、松江堀端茶会が催され、三斎流は五月三日、歴史館での担当でした。当日は曇り時々雨といった天気でしたが、しっとりとした緑の歴史館の庭、そのむこうに松江城を望むお席でした。

また当日は宗育宗匠、典子先生にお越しいただき、和やかな一席がもてた事も大変嬉しい事でもありました。

お堀端茶会

○出雲大社大茶会

平成二十八年六月十五日・十六日
出雲大社　社務所
担当　山崎・山本・下垣・大野社中
来客者数　十五日　六〇〇名
　　十六日　四四六名

今年の出雲大社茶会は、おおやしろ様のご加護と四社中の同心で、初日六〇〇名、二日目は、最悪な天候でも四五〇名、日々、十四点前をし、無事終える事が出来ました。

まず、観翠庵の森の緑が美しく栄えるように「翠」の銘の干菓子を出し、お点前は長板二段、点前二十分。と同時に五〇名にお出しした菓子器、茶碗を下げることに心がけた結果、凛とした会場を創ったように思います。その為の打ち合わせを大事にいたしました。

陰の力、水屋でも、充分なお湯が沸かせない状況にも関わらず、御三方の猛働きに感謝のみでした。

出雲大社　社務所

○講習会

平成二十八年三月六日(日)
出雲文化伝承館　松籟亭
担当　研修部
参加者数　七三名

午前は「釣釜・入子点（平棗・五徳蓋置使用）」の点前講習。

初めに、山崎智恵子先生から注意点と所作をしながらの説明を聞き、その後、点前を見て頂いたので非常に解りやすく、理解できたと皆様に喜んで頂きました。

午後は家元様に「道具の仕舞い方」という大雑把な題目でお願いしたにもかかわらず、軸・花入・釜・茶入・茶碗など一つ一つ扱い方や保管の仕方を教えて頂き、目からうろこ状態でした。質問も活発で大変盛り上がり、有意義な講習会になりました。

お軸について説明される宗浦家元

点前の説明をする山崎先生

祝・米寿 おめでとうございます

今年度から、九曜会会員の皆様の中で米寿八十八歳の先生方をご紹介し、お祝いを申し上げたいと思います。また、今回のみ八十八歳以上の先生方もご紹介し、ご長寿をお祝いしたいと思います。

（敬称略）

●米寿の方（昭和4年生まれ）
禿　晴雄（顧　問）
辰村　栄（副会長）
梶谷タツ子（大野社中）
遠藤　芳江（安来社中）

以上4名

●八十八歳以上の方
直良　光洋（顧問）大正9年生まれ
嘉本　健二（顧問）大正13年生まれ
横井謙二郎（顧門）大正15年生まれ
松浦　快芳（顧問）昭和3年生まれ
讃岐　孝子（顧問）昭和元年生まれ
杉原　昭子（顧問）昭和2年生まれ
伊藤　末子（顧問）大正13年生まれ
曽田　文雄（顧問）昭和2年生まれ
清水　幹子（一般）昭和2年生まれ
松本すずえ（辰村社中）昭和3年生まれ

☆末永いご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

○三斎流九曜会公式HP開設

三斎流九曜会の公式ホームページ（HP）をこのたび新たに開設しました。内容は三斎流の歴史、お茶会ブログ、活動紹介、行事予定、教室紹介、さくら会ブログ等です。会員の皆様方へはもちろん、対外的な情報発信も強化していきます。現時点で「三斎流九曜会」で検索すると、トップページの上位に出てきます。将来的に、「三斎流」で検索しても上位にくるようにしていきたいと思います。HPのURLは'http://sansairyu-kuyoukai.comです。ぜひご覧ください。HPのデザイン、内容に関してのご意見、ご感想があればお聞かせください。

（梶谷旭生）

編集後記

今年度から新たに、社中（先生）紹介として先生方へのインタビュー記事の連載を始めました。また、米寿になられた諸先生方のご紹介とお祝い、毎号恒例の和田貞夫副会長の特集記事、三斎流九曜会公式HPの開設紹介等、盛り沢山の内容となりました。皆様のご協力に感謝申し上げます。広報部も昨年度からフレッシュな部員も加わり、活発な部となってきました。HPも開設し、内外ともに積極的に情報発信していきたいと思います。

今後も変わりませずご指導、ご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

（吾郷俊子）